

# 第 I 章 調査に到る経過

本貝塚は1976年に大浜永亘が発見した中世貝塚である。この貝塚、即ち集落跡に関しては、現在までの調査では文献史料中に全く見当らず、また地元の古老達の口碑にも現われてこない。戦前まで、当地は亜熱帯地域特有のブッシュであったが、戦後、移民の人々によって開墾され、牧草地として利用されていた。貝塚発見当時は原野であった。近年、農地開墾の事業化の進展に依って畑地化され、立地が砂丘である為、貝層の破壊は日増しに著しくなった。それと伴におびたしい土器、青磁、南蛮類が地表に露呈した。特に注目されたことは、他の集落跡と異なり近世遺物はおろか染付類の陶磁器散布がほとんど見られないことであった。それ故、該貝塚は、八重山群島に於ける中国陶磁の出現・発展が何時まで溯り得るのか、また陶磁器搬入以前の社会との接点は何時、どの様な形で求められるのかと言ったことを知り得る数少ない重要な遺跡と考えられた。

大浜永亘と関口広次は、過去5年以上に亘って八重山出土の古陶磁について、共同作業を続けてきた。上記の問題は常に脳裏にあり、仲筋貝塚遺跡の破壊の危機を目前にした中で、学問的情熱に燃える有志に働きかけ、1979年12月に発掘調査団を結成した。沖縄では大浜永亘・阿利直治の両名、東京からは関口広次、谷川章雄、中沢富士雄の三名が調査に参加することとなり、石垣市教育委員会を始めとして地元の方々の有形・無形の協力を賜ることが出来た。また東京国立博物館東洋課長長谷部楽爾先生からは大いなる御支援を賜った。

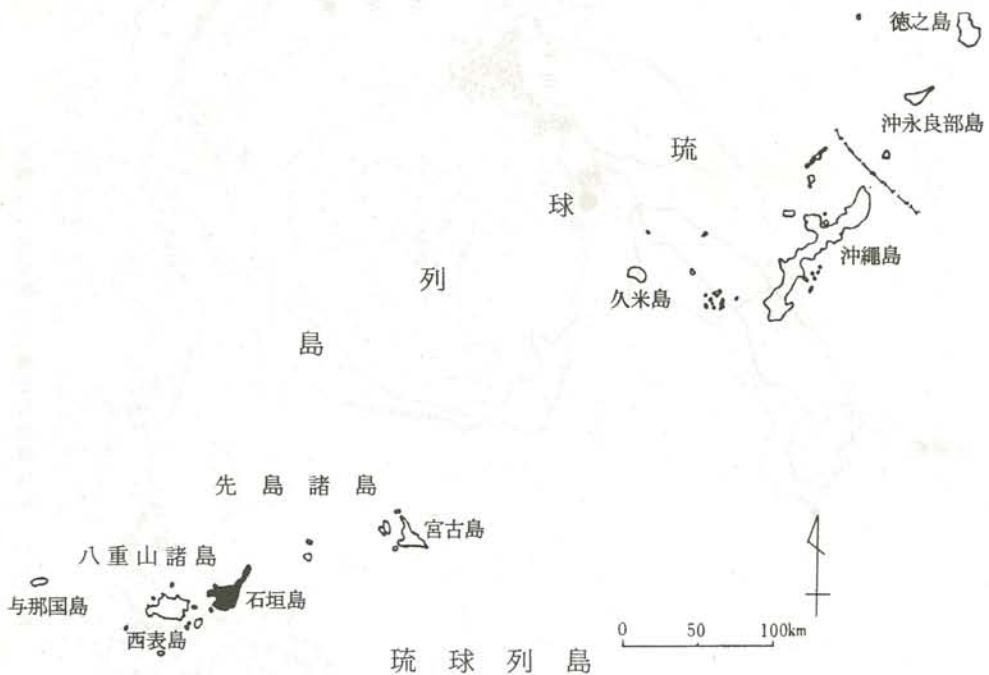


Fig. 1 石垣島の位置



Fig. 2 仲筋貝塚の位置(1)と周辺の主な遺跡

調査は職場の異なる調査員が一時に集まれる唯一の期間である冬休みを利用した。1979年12月26日から翌年1月6日までの年末年始の全日程を調査にあてた。あいにく1980年1月2日から5日までは連日の雨模様であったが、調査は続行し、1月6日には埋め戻し、遺物梱包など全ての作業を無事終了した。

発掘調査地点は、鍬の深く入っていない貝層の残りの良い部分である地境を選んだ。発掘調査の許可を心よく承諾下された土地耕作者の根間亀吉氏（石垣市吉原字川平1,218）及び土地所有者の古波蔵永善氏（石垣市字登野城189）の両氏、交渉の際同行され御協力下された伊波寛氏、深石隆司氏には深く御礼申し上げる次第である。

（関口 広次）

## 第Ⅱ章 調査の内容

### 第1節 遺跡の概観

仲筋貝塚は沖縄県石垣市字仲筋の地籍に含まれ、石垣島北海岸の川平湾を望む標高40m<sup>(1)</sup>前後の南から北へゆるやかに傾斜する砂丘上に位置している。現在の海岸線からの距離は直線で約400mある（Fig. 1・2, PL. 1(1)）。貝塚は主として海水産の貝で形成された主鹹貝塚であり、約10×5mの楕円形の貝層が点在するいわゆる列点貝塚である。こうした小貝層は、われわれが調査中に確認したものとしては、県道川平・伊原間線の北側に1カ所、南側に3カ所あり、さらに県道南側に存在すると地元の方から聞いた1カ所（これはサトウキビ畑の中で結局確認できなかった）を含め、計5カ所を数える。現在、仲筋貝塚の一角は県道をはさんでカボチャ、カラシナ等の野菜やサトウキビの畑として利用され、そのために耕作による攪乱が著しい（Fig. 3）。

仲筋貝塚のすぐ北、川平湾に面した石灰岩の岩山から海岸にかけてのキシパラと呼ばれる一帯にも陶磁器、土器等が散布している（Fig. 2-2）。この遺跡の詳細は未だよくわかっていないが、その場所がちょうど仲筋貝塚から眼下に見下ろせる位置にあり、仲筋貝塚との関係を推測させる。

仲筋貝塚は早稲田大学によって確立された八重山考古学の編年では、外耳土器を主体とする多量の土器、陶磁器、鉄製品、石器、貝器、骨角器を出土する第Ⅲ期に位置づけられる。<sup>(2)</sup> この時期の遺跡は近年行なわれた分布調査の成果によると、石垣島の全遺跡数、85遺跡のうち半数以上の47遺跡にのぼる。<sup>(3)</sup> これらの遺跡のなかで発掘調査が行なわれ、その実態が明らかにされているものは5分の1程度であるが、ここではその代表的なものをあげておきたい。

まず、石垣島北部には、明治37年（1904）に鳥居竜蔵によって発掘された川平貝塚が